# *The Kitchen Madonna* に関する一考察

## A Study of *The Kitchen Madonna*

鬼塚　雅子

ONIZUKA　Masako

# *The Kitchen Madonna* に関する一考察

## A Study of *The Kitchen Madonna*

鬼塚　雅子
ONIZUKA　Masako

Abstract：Recently the topics concerning children's mental disorders and brain disorders increasingly have been taken up by TV programs and newspapers. However, when Rumer Godden was writing *The Kitchen Madonna*（1967）in the 1960s, medical phrases such as autism spectrum disorder, Asperger syndrome, and developmental disability were hardly ever heard. The boy hero in *The Kitchen Madonna* is odd. If he can avoid it, he never speaks to anyone nor expresses his feelings. In other words, he is poor at communicating. He is also poor at guessing what others are thinking. No one is allowed into his room. No one must touch his things. In this paper, I explore childhood mental development, focusing on three characters including the hero while referring to stages within the autism spectrum disorder. I consider how the story develops and what the story means.
キーワード：アスペルガー症候群、自閉症スペクトラム、イコン

## はじめに

ここ数年、子どもの精神及び脳の疾患が話題となり、メディアにも多く取り上げられるようになってきた。日本で自閉症や発達障害という言葉をよく目にするようになったのは平成になってからである。1940年代にオーストリアの小児科医の名からアスペルガー症候群が知られるようになり、イギリスでは精神科医ローナ・ウィング（Lorna Wing、1928-2014）が1981年に発表した論文によって、アスペルガー症候群という用語が導入され、精神医学界に多大な影響を与えたと言われている[1]。ウィングはその後、自閉症とアスペルガー症候群をさらに統合した上位概念とし

て、1996年に自閉症スペクトラムを提唱した[2]。さらに、アメリカの精神医学会がつくっている国際的診断基準（DSM）は何度かの改訂を繰り返し、2013年からはDSM-5となり、従来の広汎性発達障害における自閉症やアスペルガー症候群の下位分類が撤廃され、すべて自閉スペクトラム症という単一名称になった[3]。したがって本稿で扱うイギリスの小説家ルーマー・ゴッデン（Rumer Godden 1907-98）の*The Kitchen Madonna*が出版された1967年頃は、まだ自閉症やアスペルガー症候群（自閉症スペクトラム）のことは世間にはよく知られていなかった。正直なところ、私自身、最初に*The Kitchen Madonna*を読んだときには大いにひっかかることはあっても、内容をよく理解できなかった。主人公の少年が普通とは違う要素を持っていることはすぐに把握できても、単に性格や家庭環境が問題であるとは言い切れないと感じながら、どう解釈してよいのかわからなかった。それから数年たち、ようやく新聞テレビでも子どもの精神や脳の障害について多くとりあげられるようになり、主人公の言動に納得がいくようになった。本稿では、発達障害、アスペルガー症候群、自閉症スペクトラムの知識を参考に、主人公の分析と作品のもつ意味を考察する。

## １．グレゴリー

金澤治監修の『思春期のアスペルガー症候群は、家族全員でサポートしよう！』（2012）によれば、「アスペルガー症候群は、自閉症スペクトラム障害に含まれる一つの診断名」で、「人との社会的関係を持つことへの障害」「コミュニケーションをすることへの障害」「想像力と創造性の障害」の３分野に障害がみられることで診断されるという[4]。しかも「これらの症状が、それぞれ程度が違ったり、全部そろって見られたり、部分的に見られなかったり、という具合で、人によってははっきりと障害が特定できないこともある」[5]とされている。主人公のグレゴリー（Gregory）は９歳の少年で、この３分野の障害をたしかに備えている。ただその程度にはむらがあり、極端な症状はほとんど見られないうえに、医師は全く登場しないので、本当にグレゴリーがアスペルガー症候群あるいは自閉症スペクトラムなのかは断定できない。だが、どこか変わっている子どもであることは作品の中の家族や近所の大人たちの会話や、友人が一人も登場しないことから察することができる。したがって、本稿では、あくまでも仮定として、グレゴリーという少年をアスペルガー症候群（現在では自閉症スペクトラム症と統一すべきかもしれないが、参考図書の引用の必要から両方の用語を使用する）の症状から分析していく。

グレゴリーは学校の成績はトップだが、人とコミュニケーションをとるのが苦手で、学校から帰るとほとんど自室である屋根裏部屋にこもり、両親ですら中に入ることを許さない。母親は「自分のことにしか関心がない」（“Gregory keeps himself to himself”[6]）とグレゴリーのことを嘆き、すっかり自分の世界の中にこもってしまっている（“He's so wrapped up in himself”p.2）と言ってため息をつく。日頃から、グレゴリーは自分でもできることなら他人と口を利きたくない（“he would never speak to anyone if he could help it”p.22）ので、いつも自分のことしか考えないと叱られてばかりいる（“Gregory—he who was always scolded for being selfish”p.20.）。親以外の大人も“Proper stuck-up I thought you were; never a word for anybody”（p.89）とグレゴリーのことを誰とも口をきかない生意気な子どもだと思っている。まだ母親に甘えたい気持ちがあるため、母親が不在の時にやりきれない気分になっても、黙っている方がよいと思い、母親に口に出していうことはなかった（“he might have said, only he preferred to keep that thought to himself.”p.2）。このような状況から、グレゴリーは人とコミュニケーションをとることを自ら拒んでいるとみなされても仕方がない。自己中心的と思われるのは、おそらく他人の感情を推測・理解するという想像力・創造性にグレゴリーが欠けるからだと考えられる。こうした状態は先に述べたアスペルガー症候群の特徴にあてはまるが、この作品が出た当時は、そのようなことは世間一般にはまだ知られていなかった。そのため母親は、娘（グレゴリーの妹）のように自分に抱きついてくることもないことから、息子には感情があるのだろうか（“sometimes I wonder if he has a heart”pp.2-3）と心配し、いぶかしがる。「会話のやりとりや、人のふれあいを苦手としている子どもは、愛情が伝わりにくい子だと思われがちである」[7]という情報が現代と違ってまだ浸透していないため、母親の誤解が息子への気持ちを曲げていることが理解できる。

建築家で忙しい共働きの両親は家を長時間空けることが多く、グレゴリーと妹ジャネット（Janet）は物心がついて以来、家政婦の世話になり、その家政婦たちの交代が絶え間なく続く環境にあった。「やっとひとりに慣れたかと思うと次の人がやってきた（“as soon as they got used to one person she went and another came— ‘One after the other,’ ”p.4）」とあるように、次から次へと家政婦が変わるという状況は、普通の子どもでも嫌であっただろうし、日々の生活の変化を嫌うアスペルガー症候群の人にはかなりの負担だったと容易に想像できる。実際、グレゴリーは“We're so tired of changes,”（p.4）とはっきり言っている。この家政婦というのは一年契約で雇われた外国人の若い女性が多く、雇い主である子どもの両親が留守中にこっそりボーイフレンドを呼び入れることもたびたびあり、それに対してグレゴリーは“We were

*invaded*”（p.6）と憤慨していた。さらに、家政婦が不在のときは、子どもたちを赤ん坊扱いする年配の家政婦が来たり、近所の家や親の友人の家で夜を過ごすことになり、グレゴリーは自分の置かれた状況を、“Always being fobbed off on people,”（p.6）という彼独特の表現で嘆いている。

しかしながら、アスペルガー症候群でなくても、物事の変化を好まない子どもはいる。例えば親の転勤で、子どもが転校を余儀なくされる場合、その変化を冒険のようにわくわくしながら受け止めることのできる子どもは新しい学校や友人たちにすぐに溶け込んでいくが、新しい土地や環境になかなかなじめない子どもはつらい学校生活を送ることになるだろう。1960年代はまだ待機児童を受け入れるシステムが今ほど整っていない時代であっただろうし、両親の共働きも今ほど多くはなかっただろうから、グレゴリーのような境遇は珍しいケースだったかもしれない。いずれにせよ、妹のジャネットは同じ状況にありながら、不満をもらしていないことから、グレゴリーが小さな変化さえも好まない性質であることは確かである。だからこそ、初老の住み込みの家政婦のマーサが来たことは生活の変化がなくなることを意味するので、グレゴリーの精神状態は安定し、その状況をもたらしてくれたマルタに好意を抱いたのだろう。幼い子どもにとって、帰宅したとき、家に明りがともり、迎えてくれる人がいることは何より嬉しいことであるのは言うまでもない。それはグレゴリーのような人と交わるのが苦手な子どもにとっては言葉につくせぬ喜びであったに違いない。

人とかかわるのを嫌い、変化のない落ち着いた生活を強く望んでいるグレゴリーだが、その気持ちを口に出すことはほとんどなく、仮にあっても、正確に伝えられなかった。残念なことに、両親でさえ息子のそのような心中を察することができず、母親は自宅に他人がくることは“it's nice to have people”（p.6）と信じて疑わずに、そのことを口にする。ここに母子の感覚の相違があり、母親は息子の心を理解できず、むしろ逆なでしている。

コミュニケーションをとるのが苦手であるのに、自分が思ったことを口にしてしまうのもアスペルガー症候群の特徴の一つである[8]。そのために誤解を生むことが多い。思ったことしか口にしないので、言ったことは嘘ではなく真実だが、それが相手の心を打つ場合と傷つける場合が生じる。自分の言ったことが相手にどう伝わるのか、相手がどう感じるのかを想像する力に欠けているからである。そのことを自覚しているからなのか、グレゴリーは口数が極めて少なく、言ったほうがいい場合も敢えて黙ったままでいる。

こだわりが人一倍強いこともアスペルガー症候群の症状で、グレゴリーも自分の持ち物に人が触ることを極端に拒んだ。飼い猫を他人に触らせることも嫌がった。このこだわりの強さが周囲

の人間には所有欲が強いと映るのだろう。実際、母親は、グレゴリーは所有欲が強い（“and he's so possessive”p.3）と嘆いている。こだわりの強さは自分の関心事に没頭することにも現れている。博物館が大好きで、石や化石をせっせとスケッチしては部屋にため込んでいる行動を、妹のジャネットは理解できず、「そんなことをして何の役にたつのか」（“But what will you do with them?”p.18）と呆れ、母親は「グレゴリーのところにはものがたまる一方だ」（“So much goes into Gregory”p.18）と溜息をつきながら、夫にこぼす。人から見れば価値がないものでも自分が関心があるものを収集する癖もアスペルガー症候群の特徴の一つである。

こだわりの強さは思い込んだら目的に向かって突っ走ることにもつながる。変化のない生活を願うグレゴリーはずっとマルタに家にいてもらうために、マルタを喜ばせたいと考える。そこでマルタのために彼女の望むイコンを探すと決めたグレゴリーは大英博物館へ行くという冒険に挑む。前もって乗っていくはずのバス路線を研究し、覚え込んでおく（すでに７，８歳のときに覚えていた）というのはかなりの知能と優れた記憶力（数字に強い）と執念を感じる。グレゴリーの記憶力のよさ（“Gregory never forgot things”p.12）は父親も認めるほどである。数字に関して優れた記憶力を持つのはアスペルガー症候群の特徴である[9]。高いバス代を工面するため、妹の小遣いをまきあげてしまうのにはやや行き過ぎを感じるが、おそらくグレゴリーには罪悪感はなく、やるべきことをやるのに必要なことだったからなのだろう。

せっかく苦労して出かけて行ったにもかかわらず、大英博物館に展示されていたイコンは兄妹二人が求めているものと違うことがわかり、できることなら他人と口を利きたくないと思っているグレゴリーが（そばに妹がいてくれたからだろうか）初対面の紳士に尋ね、宝石商へ行くという助言を得る。このときのグレゴリーの言葉使いは非常に丁寧である。そのことに作者は何度か触れている。アスペルガー症候群の人は敬語を使えるが、丁寧さの調整ができない[10]。子どもなのに妙に形式ばった敬語を使うのは、相手によって臨機応変に対応を変えることが難しいからである。知らない人に対して、というよりどんな人にも敬語を使うのだと思い、実際そうしてしまうのである。したがって、グレゴリーが外で会う（家族以外の）大人に対して、丁寧な、時には（作者曰く）古風な、難しい表現を用いているのは礼儀正しさによるものだと言い切れない。一方、兄と対照的な妹ジャネットは、深く考えずに博物館内で見知らぬ人に質問をぶつけたり、文句を言ったり、思ったことを大声で叫んだりする。慎重なグレゴリーの言動と比べて、博物館内では、ジャネットの方が空気の読めないアスペルガー症候群のように思われるほどである。しかし、この傍若無人な言動は、よく言えば子どもらしく無邪気であるとみなされるのだろう。

予定外の行動をとるのを好まないグレゴリーだが、こだわりの気持ちの方が強いと思わぬ行動

に出る。大英博物館で帰宅が遅くなって叱られてもめげることなく、イコンを求めて後日、宝石商を訪ねるのである。グレゴリーは確かに問題解決に突き進んでいる。

> The shop seemed to spread away on all sides, . . . . It was so quiet that . . . .
> The shop and the quiet seemed vast.
> "Let's go," whispered Janet, but now Gregory was not afraid. . . . .
> He stood his ground. (pp. 33-34.)

宝石店の雰囲気（空気）は厳かで、その静けさは果てしなく大きいものに思われ、圧倒されそうだったが、不思議とグレゴリーはもう恐れてはいなかった。それどころか、グレゴリーは一歩も退かない身構えだった。グレゴリーの強い決意はこだわりのなせる結果であろうか。この張り詰めた緊張感から、いよいよ目的のイコンに子どもたちがたどり着くのだろうと読者はハラハラしながら期待する。そしてようやくこれはというイコンについに遭遇する。

> . . . , but alone on one shelf was an icon of the Mother and Child that riveted Gregory' s attention at once.
> "Look," he whispered to Janet. . . . . They gazed and gazed until Gregory said aloud, "That's the one," . . . , "I should like to look at that icon, please." (pp. 36-37.)

イコンとはこういうものだったのかと、グレゴリーの眼は棚の上の聖母子の絵に釘付けになり、どんな細かい部分をも見落とすまいとしていた。しかし、宝石でちりばめられたイコンの値段は到底グレゴリーたちには手の届かないものだった。イコンへの集中と期待が崩れた怒り（このほかにも妹への怒りがあるが、それは後章で述べる）はグレゴリーの心に大きな衝撃を与えた。アスペルガー症候群の人は興味のある分野にはかなり集中できるという。あまり集中しすぎて他のことが目に入らず、自己中心的だと周囲の人たちに思われがちである。一方で、アスペルガー症候群の人は、興味のあることについては細部にいたるまで記憶できるが、未来をイメージすることはほとんどできない[11]。そのため、自分では思わぬ事態に陥り、困惑してしまう。グレゴリーは準備不足のまま店に行ってしまったことで自分たちが店の大人たちの嘲笑の的になったことを全身で感じ取ってしまったのだ。おそらくグレゴリーはここにいたるまでの過度の集中による疲労と、想定外の結果に脳も心も疲れてしまったのだろう。

失意のまま宝石店を出た直後に雨宿りで偶然入った教会で、ある聖母子の絵に出会う。それこそが、本当にマルタが求め、グレゴリーが探していた絵だったのだ。それは教会の柱にかかって

いた額に入った聖母子の絵で、さまざまな材料で作った衣をまとっていたため、画面から浮き出て見えた。ここでグレゴリーは自分で絵を作ることを言い出すが、小遣いを失くしたことに気づくと、すぐにあきらめる。その気持ちを変えさせたのは妹のジャネットであった。ジャネットはお金がなくても考えることで絵が作れると言い出す。グレゴリーはジャネットと意見が違った時、めったなことでそれを受け入れることはしないのだ（"He did not often let his young sister contradict him" p. 56）が、今回はジャネットの言葉に耳を傾け、顔をあげた。

> "How can I make it (i.e., a dressed-up picture) without any money?"
> "You can make it with think," said Janet.
> It was not what she meant to say, yet oddly it said what she meant.
> "How can you make things with *think*?" asked Gregory. He said it scornfully, but now he came to consider it, that is how things are made.
> It was as if Janet had opened a little door in his mind, a door that had been shut, and once again he glimpsed the picture. (p. 56.)

ここでイコンの制作を決心したグレゴリーにこだわりの強さが生じるが、それはいつもとは少し違うこだわりの持ち方だった。物を作るときには考えなければならない。ジャネットの指摘がこれまでのグレゴリーの心を覆っていた殻に良い意味でひびが生じ始めたのだ。その様子は心の中の小さなドアがジャネットによって開かれたようであった。すると、グレゴリーは矢継ぎ早にジャネットに絵の制作方法を質問する。絹やビロードはどうするのか、王冠にする金のレースやビーズはどうするのか、額縁はどうするのか、イエスとマリアの絵はどうするのかなど次から次へ浴びせる質問に、ジャネットは、ぼろの入った袋に端切れが入っている、白いレースに残っている金の絵の具を塗ればいい、古いイブニング用のバッグから金をはずし、聖母の絵は新聞からとってボール紙にはりつけて顔に色を塗るなどと、ひるむことなく的確に答えていく。臨機応変が苦手なアスペルガー症候群の人にはジャネットのように素早く適切な解答を出すことはできない。このジャネットのてきぱきとした反応のよさ、素早く物事を処理する方法を考え出す能力（想像力）のおかげで、グレゴリーは自分のこだわりを実現する前に計画が見えてきたのだ。

計画がほぼたてられても、ジャネットと違って、グレゴリーはすぐに行動には移さない。実行前にジャネットが呆れるほど時間をかけてじっくり考える。

> Gregory . . . studied it again. Janet would have rushed to get some scraps and started straightway on cutting out and sticking, but Gregory took his time. . . . ,

but to Janet's annoyance he went on gazing at the Madonna.（pp.61-62.）

目的達成のために思考集中力が総動員されたのだろう。これはおそらく計画を練りながら、実行するのが難しい、つまり一度に二つのことをするのが苦手なアスペルガー症候群の人の特徴なのかもしれない。彼らには途中での計画変更は難しいので、十二分に準備が必要なのだろう。ジャネットがいらいらするほど長く考えた後、イコン作成は少しずつ、ゆっくりと進んで行く。それはグレゴリーの中に変化が少しずつ生じていく姿と重なるようだ。

ジャネットの提案がヒントになって絵の作成にとりかかると、グレゴリーは絵から離れている時でさえも、ベッドに入っていても、食事をしていても、散歩をしていても、学校にいる時でさえも常に絵のことが頭を離れなかった。これは人間が何かに夢中になるときの状態であるが、学校の受け持ちの教師から父親に、最近は注意散漫だという連絡がくるほどだから、グレゴリーの夢中になっている姿は少々度を超しているのだろう。これは、自らをアスペルガーだと認める吉濱ツトムの語る「何か課題や問題に突き当たると、『何が何でも解決しなければ』という強い衝動が沸き上がり、寝食を忘れて必死に取り組む」[12]というアスペルガー症候群の特徴と一致する。アスペルガー症候群の人は気持ちの切り替えが苦手で、夢中になった物事を一旦頭から切り離すということができないということを考えると、無我夢中で作業に集中するグレゴリーの姿に納得できる。知的好奇心の強いアスペルガー症候群の人の場合、特徴である収集癖が知識に向けられる[13]という。グレゴリーがまさにそれにあてはまるが、今は勉強より、絵の制作に関心と集中力が移ってしまい、学業は二の次になってしまったようだ。

アスペルガー症候群の人は、規則性に強いこだわりを持っているので習慣化させることは得意である。こうと決めたら諦めることなく延々と取り組むことができる。つまり、一度スイッチが入ってしまえば、強力な意志力を発揮するのである[14]。だが、グレゴリーの場合、夢中に取り組んでいても、絵の制作は思うように進まない。大体の計画はたてられたが、それでも考えることは山ほどあった。考えることも含めて絵の制作に没頭するグレゴリーは誰にも邪魔されたくない。先にヒントをくれた妹ではあるが、それでもあれこれ質問しないでくれればよいのにと思った。仕事に対する興味が増すにつれて、グレゴリーはますます口数が少なくなっていく。グレゴリーはジャネットがそばにいるのをじっと我慢していた。屋根裏部屋から出て行けと妹に言わなかった。そして妹があれこれ質問するのをさえぎることさえしなかった。この様子をアスペルガー特有の過度集中の姿にすぎないととらえることもできるが、“something seemed to stop Gregory from snapping at her”（p.66）とあるように、グレゴリーの心の中にある何かが彼に

変化を起こさせ始めたと考えられないだろうか。

グレゴリーが制作に悩み苦しみ試行錯誤する様子は、ごく普通の少年の姿といえる。適した材料を探すのは難しい。グレゴリー自身も決して妥協しないで材料選びをするが、「もっとうるさいのは絵の方だった」（“Gregory was fussy but it seemed the picture was more fussy, . . . .” p.67）とあるのは絵と製作者が一体となった感がある。まさに芸術家の域に入ったのだ。その強い意志力でグレゴリーは聖母子の絵を完成へもっていくのである。

ここで注目すべきは、グレゴリーが製作中に本人も予想もしない行動に突如出たことである。なかなか絵にぴったりあった端切れを見つけることができないでいるグレゴリーに、ジャネットが帽子店へ行って、そこの女主人に残り布をくれるようにたのんではどうかと提案すると、他人と口を利きたくないグレゴリーは妹に行って頼んでくるように命ずる。大英博物館や宝石店には一緒に行ったジャネットだが、ここでは嫌だとはっきり拒絶する。もし数日後の火曜日まで待つのなら一緒に行ってもよいという妥協案を申し出るが、月曜日になると、グレゴリーは待つことに我慢できなくなり、驚くことに１人で見知らぬマダムの店へ出かけていく。絵を何としても完成させたいというこだわりの強さが、人とのかかわりを嫌うという症状を上回ったのである。現実にはアスペルガー症候群の人が実行する可能性があるのだろうかという疑問は残る。こだわりの強さはさらにマダムとの会話、マダムに自分が聖母子の絵をつくろうとしている事情を話すところでも見られる。何としても目的に達しようとすると、言い換えれば、それをしないと目的が完成しないとなると、大きな壁である人との関わりも乗り越えられるのだろう。

アスペルガー症候群の人のコミュニケーションの取り方は時として一方通行である。一方的に話しかけ、理解を求めるが、相手に合わせて待つことができない。ジャネットにあれこれ命令するのはこの一方通行によるものである。いつもはグレゴリーの言い分をすぐに実行するジャネットだが、今回は数日待つなら手伝うと主張して譲らない。しかし、グレゴリーはジャネットの都合に合わせて待つことはできない。これは何かをせずにはいてもたってもいられない場合に生じる行動だが、自ら見知らぬ大人と接することを極度に嫌うグレゴリーにとっては決死の覚悟によるものに違いない。

最後に聖母子の絵を額縁にあわせるための縁どりをどうするかを悩み、グレゴリーは長いこと考えていた。その解決をもたらしたのはまたもジャネットだった。組みひもや、リボンや、細長い端切れなどを空間に置いてみて試したが、どれもしっくりこない。あれこれ苦心しているところへ、ジャネットがたまたまトフィーを一袋もってきてくれた。そのトフィーを包んでいた宝石のように光る金箔の紙を見てグレゴリーはこれだと思った。しかし包み紙にはいろいろな色があ

り、グレゴリーが求めている色の包み紙はさほど多くない。

> "There are four metal-wrapped toffees in this quarter of a pound; that gives me eight pieces of paper if I cut them in half," said Gregory. .... "I need eight at the top and eight at the bottom of the picture, twelve along the sides. That's another pound of toffees, *presuming,*" said Gregory, "presuming I get four metal-wrapped toffees to each quarter. Janet paid one shilling and threepence for that quarter, so that a pound of toffees will cost five shillings."（p. 86.）

絵の材料として必要なだけの包み紙を買う計算の正確さと速さもまたアスペルガー症候群の特徴と言えるだろう。アスペルガー症候群の子どもは覚えることが得意で、法則性のある問題や科目、すなわち計算問題が得意だという[15]。トフィーを持ってきてくれたのはジャネットだが、トフィーを売っている店に行って頼むことを思いついたのはグレゴリー自身だった。トフィーを手に入れる仕事に、どうしてジャネットを連れて行かず、一人でやる気になったのかは、自分でもわからなかったとある。

> He went to the sweetshop. What made him decide to carry out this business, too, without Janet he did not know, but he went alone and stood studying the toffees in their big glass scoop.（pp. 86-87.）

一人で出かけたグレゴリーは、小遣いが足りないことから、自分の腕時計を担保にトフィーをたくさん売ってほしいと菓子屋に頼む。時間がかかるが、毎週貰う小遣いから少しずつ返すことを申し出る。そして自分でも気づかないうちに、菓子屋のマダムにも自分が何をしようとしているのか、なぜトフィーの包み紙が必要なのかを話していた。

ついに聖母子の絵が完成する。ここで、マルタと両親に見せる前のグレゴリーの行動にも注意を向けたい。アスペルガー症候群（自閉症スペクトラム）の子どもは方法や手順などを変えることが苦手で、規則や物の配置を守ることにこだわる傾向が強い[16]という。 つまり、グレゴリーには自分の中での秩序を守らないと気が済まないところがある。片付けができない子どももいるが、グレゴリーの場合、"It was Gregory's tidy way, though Janet had grown impatient"（p. 93）とあることから、片付けも彼にとって守らなければならない秩序なのだろう。完成品を早く両親に見せたいジャネットと対照的に、順序を守り、自分なりの演出（こういうふうに見せたい）を完成してから作品のお披露目にもっていきたいのだ。

そのお披露目にために、両親に屋根裏部屋へ来るようにグレゴリーの伝言を伝えたのはジャネットだった。両親がやってきて絵を見ると、ジャネットがはじめに話し出し、グレゴリーがその補足説明をした。そして、「ジャネットのおかげで、とうとう絵を作る方法を思いついた（“because of Janet I found a way to make the picture after all”p.96）」と言う。そのときジャネットは嬉しさで顔を輝かした。これはジャネットの勘違いである。「正直で嘘をつけないアスペルガー症候群の人の特徴は … 思ったことしか口にしない … その人が言った言葉は、すべて真実だということ」[17]になる。つまりグレゴリーは事実（絵の作成はジャネットの提案だった）をありまのままに言っただけだが、ジャネットは自分のことを高く評価してくれたと思ったのだ。いわば幸せの勘違いである。グレゴリーも単に事実を報告したのだから、訂正することもなく、ある意味、万事めでたしである。これと同様なことが母親との会話にもみられる。グレゴリーが完成した絵を見せると、母親はそれまで何かを作る、誰かのために何かするということがなかった息子が成長したと思い、感激のあまり泣き出す。それを見たグレゴリーには母の様子が理解できず、両親のいいつけを守らなかったこと以外に自分は悪いことをしていないのになぜだろうと思い、危うく泣きそうになりながら “Why are you so miserable? What have I *done*?”（p.97）と母親に問う。これは想像力の障害（欠如）を持つアスペルガー症候群に見られる症状で、相手の立場にたてない、相手の感情を読み取れないため、なぜ母親が泣いているのか理解できない故の質問なのである。母親も娘のジャネット同様、グレゴリーに対して幸せの勘違いをしている。

> “You let us in, Greg, and you have come out,” said Mother, which they (i.e., Gregory and Janet) did not understand. “I'm not crying because I'm miserable,” said Mother. “I'm crying because I'm happy.” And she put her arm around Gregory and held him close as if he were Janet — and, Gregory “allowed her to,” said Janet.(p.97.)

母親はグレゴリーが自分たちを部屋に入れてくれたことに対して狂喜し、戸惑うグレゴリーを抱きしめる。先にも述べたように、まだこの時代は世間での認知度が低いため、母親は息子がアスペルガー症候群だとは認識していない。どこか普通の子とは違っていることだけは気づいている。そのような母親が、やっと息子が自分たちに心を開いてくれたのだと幸せの勘違いをしても誰も否定しないだろう。

## 2．マルタ

“Then Marta had come to help in the house . . . from the first he had taken an interest in her, which was strange . . . .” p.2）と作品の初めに描かれているように、人見知りが激しく、人と話すのを嫌うグレゴリーがはじめからマルタに興味を示した。それは不思議なことだったとあるのは、それまで大勢の若い外国人の家政婦が何人もいたが、彼女らには全く興味を示さなかったからだ。マルタは子どもの好きなゲームもしないし、陽気でもないし、そろそろ初老の年齢である。それでもグレゴリーに受け入れられたのは、彼女も孤独を抱えた一人の人間として、グレゴリーと苦しみを共有しているからである。マルタは生まれ故郷のウクライナの村から兵隊たちに追われ、難民として逃げ出したという経歴を持つ。マルタはそれ以来英国で住み込みの家政婦として生計をたてていた。グレゴリーの家に来る前は他家に22年もいた。それなら友人や知人がいてもおかしくないのに、マルタを訪ねてくる人もいないし、自分から外出することも少ない。さらに、マルタは身体が重く、動作がゆっくりで、のろのろしていた。近所の住み込みのお手伝いや通いの家政婦たちから、ばかにされ、笑いものにされていた。「マルタは友だちを欲しいと思っていない様子だった」という表現は作品中に二度でてくる。

> Marta, it appeared, did not want friends.（p.6.）
> It seemed too that she did not want to make friends, . . . .（p.7.）

マルタはお喋りな隣の家政婦を見かけると、すぐに台所に隠れてしまう。グレゴリーも同じことをしたとある。マルタが人とコミュニケーションを取らないのは、性格だけでなく、言葉の問題もあるようだ。かなりの年数を英国で過ごしたにもかかわらず、お喋りでないマルタの英語はいまだにどこかたどたどしい。そのことからも他人と話そうとしないのだろう。また誰かと親しくなると、どうしても身の上話や経歴を話すことになる。マルタはつらい過去のことはできれば口にしたくないのだろう。友達がいない、つくろうとしない、他人に話しかけない、外出を好まないなどの共通点から、グレゴリーは年齢も立場も全く違うマルタに深い共感を抱いたに違いない。しかし、グレゴリーもマルタも自分たちのそのような気持ちに気がつかない。ただマルタの存在が自分にとって重要であることだけをグレゴリー自身しっかり認識している。

> To Gregory, the important thing about Marta was that she was always there.
> When they came down in the morning, Marta was in the kitchen making coffee

> and toast, . . . . When they came in from school she had their tea ready on the kitchen table and to Gregory it was inexpressibly lovely to come home knowing the house would be lit and welcoming instead of dark, forsaken, with a note telling them to go next door. When they went to bed they knew the house was safe because Marta was downstairs in the kitchen getting dinner ready. (p. 4.)

上記にあるように、グレゴリーにとってマルタが重要な意味をもっているのは、いつも家にいてくれるということだった。たとえ自分の部屋に閉じこもっていても、自分たちが安全であるということがわかっていると心が落ち着く。グレゴリーは自分の気持ちをうまく表現できず、他者とコミュニケーションをとるのが嫌いだが、実は人一倍寂しがりやであり、安定した毎日を送ることを何より願っているのである。そのような平凡な毎日が、マルタの登場によってようやくグレゴリーの生活にもたらされたのだ。環境に影響されやすいアスペルガー症候群の人には変化の少ない落ち着きが必要なのである。

誰もグレゴリーの持ち物や猫のルートルに障ることはできない。これは先に述べたように、アスペルガー症候群の特徴の一つである「こだわりの強さ」である。しかし、その猫のルートルにマルタが触ることをなぜかグレゴリーは許している。マルタがやってきた最初の日から、マルタがルートルに食べ物を与えたり、抱き上げてもグレゴリーは文句を言わなかった。これが周囲の人間には驚きだった。それは、捨て猫だったルートルも辛い経験をしていることでマルタと同じだったからではないだろうか。なぜなら、マルタは足を、ルートルは頭にそれぞれ傷をもっていたのだ。自分が他の子どもと違うことで辛い思いをしてきたグレゴリーには、マルタとルートルの苦しみがなんとなくわかるのだろう。

母親は作品の中でも何度か「所有欲が強い、自分のことしか関心がない、何も手を出さない（何もしない）」と息子のことを嘆く。このことから、息子に対して日頃の態度を直接口やかましく注意していただろうことは容易に想像できる。だが、マルタは口下手で英語が苦手なことや家政婦という立場もあって、グレゴリーに小言も言わないし、注意もしない。そのようなマルタのそばは居心地がよいのだろう。加えて、台所はつねに温かく（火を使うため）、美味しい食べ物であふれている。子どもにとって、まして人と口をきくのが嫌なグレゴリーにとって、黙ったまま受け入れてもらえる最高の居場所である。また、グレゴリーが屋根裏部屋にこもっているように、マルタも与えられた居間に行かず、いつも台所にいた。こうした習性にもグレゴリーは自分でも気づかないうちにマルタに共感を抱いていたのではないだろうか。要するに、マルタとの付かず離れずの関係がグレゴリーにとっては負担にならず、一番気持ちが落ち着けたのである。

マルタの存在はグレゴリーの母親にも安心をもたらした。“Marta was a boon to Mother.”（p.3）ともいうべき存在で、母親は“She's the best help we have ever had,”（p.3）とマルタを絶賛している。マルタはよく働き、疲れ知らずで、清潔で、料理が上手だった。マルタによって子どもたちの心が落ち着けば、母親も同様である。グレゴリーに言わせれば、家の中は平和で、落ち着いている（“It was peaceful and, 'Steady,' ”p.5）ようになった。だからマルタがいつかよそへ行ってしまうのではないかという不安が絶えずあり、なんとか自分の家で幸せに満足して暮らしてもらいたいと願っている。思ったことをすぐ口にする妹のジャネットは,“We need you too,”（p.7）とマルタに直接言う。一方、グレゴリーは、妹のように“We need you. Stay with us forever”（p.7）と口に出して言えたらと願うに留まる。心底願うのだが、どうしても言えないのだ。

グレゴリーは他人に関心がないと言われ続けていたが、マルタが故郷やイコンのことを思って泣いたとき、グレゴリーも泣きたくなった。人の感情を推し量ることが難しいグレゴリーが、自分でもこれまで経験したことのない感情で満たされたのだ。人に触られたくない、触りたくないグレゴリーがぎこちなくマルタの肩を軽くたたいたのは、思わずマルタを励まそうと思ったからに他ならない。これはグレゴリーにとって大きな変化であり、成長への第一歩と言えるのではないだろうか。だからと言って、その後、グレゴリーが劇的に変化するわけではない。グレゴリーがマルタを慰めるためにイコンを探そうと思ったのは、マルタにずっと家にいてもらいたかったからであり、それはやっと落ち着いた変化のない生活を守るためであった、すなわち自身のためであるが、大好きなマルタを喜ばそうと願う気持ちがあったことも確かである。そのような自分の気持ちを口に出して言えないグレゴリーは行動で示そうとする。つまり、マルタの望みである聖母子の絵（イコン）を方々探したり、ついには自ら作ろうと決心するのであった。たとえ、自分の安定した生活を守るという、いわば自己保身であったとしても、それまで自分の事しか考えないと親を含めた周囲の人に言われ続けていた少年にとって、人のために何かすると言う行動は人生で最も画期的なことであった。おそらく最初はもっと簡単にマルタの望む絵が手に入ると思っていたに違いない。しかし始めてみると、想像以上に時間がかかり、他人とのコミュニケーションをとることや、材料集めから始まる物の制作など、これまで自分がやったことのないことや苦手なことをこなさなければならなかった。しかし、絵は完成し、その苦労は報われ、マルタには喜ばれ、グレゴリー自身も成長する。マルタは聖母子の絵を見ると、皆にわからない言葉（つまり母国語）を口にする。それは感謝と賛美の祈りであり、歌（“it was a prayer or a hymn of thanksgiving and prasie”p.100）であった。マルタの祈りの声に猫のルートルの喉を

鳴らす音が加わり、やがてマルタの幸せに満ちた陽気な笑いが台所に広がった。この音の広がりが、この家族の住む家全体を幸せで満たしたようだ。マルタの言葉はわずかだが、彼女の気持ちはグレゴリーたちに十分伝わった。グレゴリーにとってマルタの存在はまさに家（“She *is* the house”p.2）なのである。

## 3．ジャネット

グレゴリーが唯一自室に入るのを許可しているのは妹のジャネットだった。グレゴリーは自分にとって必要だと思われる時は、ジャネットを連れて行動した。ジャネットは決して優等生ではなく、ごく普通の女の子である。おとなしいとも素直ともいい難いが、明るく元気で、やや世話焼きで、やや親切である。時にはグレゴリーの言いなりになり、時には反発し、文句を言う。その少し厚かましいが、さっぱりした気質がアスペルガー症候群の人にはちょうどいいパートナーとなるのだろう。この作品で、グレゴリーがアスペルガー症候群だとすると、妹のジャネットが唯一のサポーターだと言える。両親（特に母親）は嘆くだけで息子を理解していない。こだわりの強さを所有欲が強いと嘆くばかりである。学校の教師もちらりと登場するが、生徒への理解があるとは言い難い。ジャネットだけが、グレゴリーがコミュケーションをとれる唯一の存在である。その二人は次にあるように対照的な兄妹である。

> No brother and sister could have been more different. Janet was pretty, a well-grown little girl, plump, with dimples, lively brown eyes, golden-brown curls. “A cherub,” said Marta. Gregory, though older, was smaller, and pale, with thin legs and knobbed knees and strangely large hands with long fingers. “Clever hands,” said Mother. His face was small and pale, too, while his big gray eyes were made bigger by dark-rimmed spectacles. When Gregory sat working in his Loft, his face knotted with thought, his hair ruffled, his eyes peering through his spectacles, he looked like an old professor. （pp.18-19.）

兄妹でありながら、容姿も性格も全く異なるからこそ、喧嘩しても、お互いを補い合いながら、なんとかうまくやっているのではないだろうか。また、その発育のよさとおおらかな性格から、ジャネットは妹でありながら、時には同年代の友として、時には弟をいたわる姉のようにグレゴリーに接しているようである。

そのようなジャネットと一緒に、グレゴリーはマルタのためにイコンを探しに大英博物館に行く。グレゴリーがいったんその気になると、ジャネットを好きなように動かすことができた（“When Gregory chose, he could make Janet do anything he wanted . . . .”p. 20）とあるが、バス代のために小遣いをまきあげることはできても、その言動は意のままにはできない。大英博物館へ行く道を人に尋ねなければならなくなったとき、できることなら他人と口を利きたくない（“he would never speak to anyone if he could help it,”p. 22）グレゴリーはジャネットに二回も道をきかせた。そのため、博物館内でイコンの場所を聞くのをジャネットは拒絶した。するとグレゴリーは重々しい態度で制服を着た男に尋ねた。館内のジャネットは行儀がよいとは言えない。響く声で紳士につっけんどんな言い方をしたり、グレゴリーに非難がましい調子で言い返したりする。礼儀正しいグレゴリーにとってジャネットの傍若無人な（子どもらしいともいえる）態度は我慢ならず、文句を言うと、ジャネットは全く反省することなく、反抗する。つまり、二人は口喧嘩を始める。グレゴリーがアスペルガー症候群で、大人が支援者なら常に優しく甘やかしてしまうだろうが、ジャネットには遠慮がない。子ども同士、兄妹故に、気持ちをストレートにぶつける。これはアスペルガー症候群の少年には一番効果のある対処法のように思える。

親に内緒で大英博物館に出かけ、バスを乗り間違えて帰宅が遅れたことから、二人は両親に怒られ、外出を禁止される。そこでグレゴリーは、次は自分一人で出かける、ごたごたにまきこまれるからジャネットには来るなと言う。しかし、ジャネットは自分を説得しようとするグレゴリーの言葉を振り切って、自分も一緒に宝石店に出かけると言う。この時のジャネットの言動が兄を心配してなのか、彼女の好奇心からなのかは判断しにくい。先にも述べたように、ジャネットはグレゴリー以上に空気が読めないところがあり、あまり考えずに思ったことをすぐに口にしてしまう。普段から深く物事を考えてから慎重に行動することをしないタイプの子どものようだ。グレゴリーが止める暇なく、宝石をちりばめたイコンの値段を店の人に聞き、周囲の笑いを浴びる。その屈辱と恥ずかしさにグレゴリーはどうやって店の外に出たのか覚えていないほどだった。

> Gregory did not know how he got outside; he only remembered that there was a buzzing in his ears as he dragged Janet across the crimson carpet and that the shop and its lights seemed to swim around him. . . . , but Gregory . . . , wrenched open the door, pulled Janet through it, and slammed it shut.
>
> In the street he walked so fast he did not look where he was going and Janet had to trot to keep up with him. “Idiot! Silly idiot,”said Gregory, but Janet had no idea what she had done. （p. 39.）

グレゴリーは怒りと恥ずかしさで、ジャネットに“Idiot! Silly idiot”（p.39）と罵声を浴びせるが、当のジャネットは自分が一体何をしたのかさっぱりわからなかった。さらに、グレゴリーは宝石店に行こうと言い出したことで、自分のことも “Fool! Fool!”（p.40）とののしるが、これもジャネットには理解できなかった。人とコミュニケーションがとれ、友人もいるジャネットだが、相手の気持ちを察する力は強いとは言えない。考えずに自分の思ったままに言動をとるところは、多少アスペルガーの要素を持ち合わせているのかもしれない。グレゴリーの症状にはむらがあり、アスペルガーと言い切れないところもあるが、ジャネットの愚かな行動と合わせると、兄妹二人でアスペルガー症候群が形づくられているようにも思える。言い換えれば、ジャネットとグレゴリーは裏表、二人一対の存在のようだ。

人生の中で最大と自身が感じる屈辱を味わったグレゴリーだが、その後、雨宿りで寄った教会で、マルタが本当に求めていたイコンがいかなるものか理解する。それは教会の柱にかかっていた額に入った聖母子の絵で、その時グレゴリーは自分が作ると言い出すが、小遣いを失くしたことに気づくと、すぐにあきらめようとする。その気持ちを変えさせたのは、お金がなくても考えることで絵が作れると主張するジャネットであった。

こだわりの強いグレゴリーはジャネットがいらいらするほどゆっくり時間をかけて絵の制作を進めていたが、普通の子どもにはそれほどの我慢強さはない。そこでジャネットはグレゴリーの念入りなやり方にくたびれ、飽きて、隣家に遊びに行ってしまう。

> She was getting tired of Gregory's fussiness and besides, . . . .（p.67.）
> Janet got tired of the picture and went to play next door.（p.80.）

ここも対照的な二人である。一章で取り上げた絵（イコン）の制作案の問答では鋭い頭脳と感覚を示したジャネットだが、忍耐強さに欠けてすぐ飽きてしまうところはどこにでもいる少女にすぎない。そのギャップに少々戸惑うが、グレゴリーには必要な人物なのだ。もしジャネットが終始一緒にイコン制作にかかわっていたら、グレゴリーは息もつけないだろう。自分のペースで十分に考え考え、地道に完成に向かって作業をしていくことに水が差される可能性がある。制作中にジャネットが不在なことはグレゴリーにとっては幸いなのである。

深く考えに考えた挙句、聖母子の絵の制作という目的に向かって行動を起こすのはグレゴリーだが、ヒントはすべてジャネットから出ている。先に述べたように、絵の材料に何をどう調達し

たらよいのか、聖母子の下絵を新聞からとってはどうかなど、グレゴリーとのやり取りの中でジャネットが具体案をだしていく。空のように見える背景を作るのに、グレゴリーの大切にしている船の絵を使ってはどうかとジャネットが提案したときには、船の絵に強いこだわりを抱いていたグレゴリーはかなりのショックを受けた。にもかかわらず、グレゴリーはこだわりを捨て、自分の船の絵を犠牲にする。さらに材料探しに行き詰った時に、帽子屋へ行くことを提案したのもジャネットだし、額縁の縁取りを考えていた時には、ジャネットが偶然持ってきた菓子のトフィーの包紙がヒントになった。長々続く作業に飽きてしまい、兄を置いて友だちの家に遊びに行ってしまうジャネットだが、がんばっている兄のことを思って、自らの意思で自分の人形を二つグレゴリーに提供する。その人形の髪の毛や首飾りをグレゴリーは材料として使う。ジャネットは欠点も多いが、鋭い洞察力、思い切りの良さ、スピーディな行動力がある。それらはすべてグレゴリーに必要なものである。

完成した絵を見に、屋根裏部屋に来た両親に、グレゴリーはジャネットのおかげだと言うと、ジャネットは嬉しさで顔を輝かす。１章で述べたように、これはジャネットの勘違いであるが、ほほえましい場面である。なぜなら、グレゴリーとジャネットの二人の心の中にはお互いの信頼と愛情があるからだ。

おそらく、グレゴリーとジャネットは互いに成長するために不可欠な存在であるといえよう。物語の最後でジャネットがグレゴリーに向けた言葉は兄への最大の賛辞である。

> “Gregory, you know what? I think your picture’s better than the ones in the Museum.”. . . .
> “It is, and *much* better than the four hundred and thirty-eight guineas one in the jewel shop!”（p.102.）

これに対して、グレゴリーは”“Don’t be a silly idiot,”（p.102）と言いながらも、嬉しさを隠せない。たとえ喧嘩や言い争いをしても、兄妹故に、最後には分かり合えるのである。ジャネットの賛美は兄への信頼と愛であり、喜ぶグレゴリーも素直に妹の愛を受け入れている。

## おわりに

実際にアスペルガー症候群の人が周囲の対応によってどのくらいその症状がよくなるのかはわ

からない。症状の程度は人によるという、知能の高さによっても違うという。グレゴリーは高度な知能を持っているため、学習すれば周囲に合わせることもできるようになるだろう。また妹ジャネットとの関係が彼の状況に多いに助けになっている。ジャネット自身も欠点が多く、いわゆる優等生でもない。だが、明るく元気で、物おじせず、やさしい心をもった少女である。その妹が意識することなく、ごく普通の兄妹のように接していることがグレゴリーには良い刺激になっている。つまり、妹はグレゴリーによって必要不可欠な存在なのである。

ゴッデンが発達障害の知識を十分にもっていたとは思えないが、彼女の作品にはそれ以前の児童文学では日の目を浴びなかった分野や人物のスポットライトをあてたものが多い。*The Doll's House*（1947）では主人公たちが人形であったとしても、それまで児童文学ではタブーとされていた殺人をテーマに扱い、*The Diddakoi*（1972）では孤児となったジプシーの少女がイギリス社会で経験する差別や学校での苛めをとりあげている。*Thursday's Children*（1984）では、今でこそもてはやされているが、当時は軽視されていた少年バレエダンサーが主人公である。ゴッデンは子どもの世界が舞台であっても、壮絶な苛めや嫉妬による策略などを容赦なく描いている。これは、幼少時にインドで過ごしたゴッデンが、本国に帰国後、イギリスの生活や人間関係になじめず、苦労し、転校を繰り返したことが作品に組み込まれているからだと言われている[18]。グレゴリーも学校に（友人が一人も登場しない）、そして社会になじめない孤独な少年である。家族にも十分理解されていない。その彼がイコン探しから制作に至る過程を通して成長し、一筋の光が見えてきたところで物語は終わりを告げる。彼の将来がどのようなものになるかは読者の想像にゆだねられている。現実は厳しいかもしれないが、自閉症スペクトラム（アスペルガー症候群）の少年を描いた一作品として読むことには多いに価値があると言える。

大英博物館で出逢った紳士は次のように兄妹に説明する。

> . . . , "An icon is more than a painting. It is meant to be a link between earth and heaven, a window opening onto sacred things. That's how people looked at them."（p. 25.）

グレゴリーにはその紳士の言葉が理解できると思われた。マルタが感じていたのもそういうことだったのだと納得する。イコンは神聖なものに対して開かれた窓だという言葉は興味深い。この地上の世界と天国という二つの世界を結びつけるのがイコンだという。グレゴリーにとっての二つの世界とは、それまでの自分の世界に閉じこもっていた生活と他者を受け入れるようになった

広がった世界ではないだろうか。イコンによって心の窓が開かれ、イコンの制作で成長したグレゴリーが人生に前向きに進んでいく姿を暗示しているように思われる。

〈注〉

1　サイモン・バロン＝コーエン著、水野薫・鳥居深雪・岡田智訳『自閉症スペクトラム入門』（中央法規、2017）p.35.

2　本田秀夫著『自閉スペクトラム症の理解と支援』（星和書店、2018）p.37.

3　同掲書、pp.37-39.

4　金澤治監修『思春期のアスペルガー症候群は、家族全員でサポートしよう！』（日東書院、2012）p.11.

5　同掲書、p.11.

6　Rumer Godden, *The Kitchen Madonna* (Bethlehem Books, North Dakota, 2009) p.1.
以後この本からの引用は文中にページ数を記す。

7　佐々木正美監修『アスペルガー症候群（高機能自閉症）のすべてがわかる本』（講談社、2007）p.34.

8　『思春期のアスペルガー症候群は、家族全員でサポートしよう！』p.28. 『アスペルガー症候群（高機能自閉症）のすべてがわかる本』p.12.

9　本田秀夫監修『自閉症スペクトラムがよくわかる本』（講談社、2015）p.36.

『自閉スペクトラム症の理解と支援』p.27. 『アスペルガー症候群（高機能自閉症）のすべてがわかる本』p.22.

10　藤野博監修『発達障害の子の「会話力」を育てる本』（講談社、2017）p.48.

11　『自閉スペクトラム症の理解と支援』p.27. 『自閉症スペクトラムがよくわかる本』p.36.
『アスペルガー症候群（高機能自閉症）のすべてがわかる本』p.22.

12　吉濱ツトム『アスペルガーとして楽しく生きる』（風雲舎、2015）p.116.

13　同掲書、p.115.

14　同掲書、p.80.

15　『アスペルガー症候群（高機能自閉症）のすべてがわかる本』p.22.

16　『自閉症スペクトラムがよくわかる本』p.31.

17　『思春期のアスペルガー症候群は、家族全員でサポートしよう！』p.28.

18　藤野幸雄編訳「ルーマー・ゴッデン」『世界児童・青少年文学情報大辞典』第４巻（勉誠出版、2001）pp.298-300.

〈参考文献〉

Rumer Godden, *The Kitchen Madonna* (Bethlehem Books, North Dakota) 2009

藤野幸雄編訳「ルーマー・ゴッデン」『世界児童・青少年文学情報大辞典』第４巻、勉誠出版、2001

サイモン･バロン＝コーエン著、水野薫･鳥居深雪･岡田智訳『自閉症スペクトラム入門』中央法規、2017

本田秀夫著『自閉スペクトラム症の理解と支援』星和書店、2018

藤野博監修『発達障害の子の「会話力」を育てる本』講談社、2017

アミー・クライン、フレッド・R・ヴォルクマー、サラ・S・スパロー編、山崎晃資監訳、

小川真弓・徳永優子・吉田美樹訳『総説 アスペルガー症候群』明石書店、2008

本田秀夫監修『自閉症スペクトラムがよくわかる本』講談社、2015

金澤治監修『思春期のアスペルガー症候群は、家族全員でサポートしよう！』日東書院、2012

佐々木正美監修『アスペルガー症候群（高機能自閉症）のすべてがわかる本』講談社、2007

畠山昌樹『ぼくはアスペルガーなお医者さん』株式会社KADOKAWA、2015

藤野博監修『発達障害の子の「会話力」を育てる本』講談社、2017

吉濱ツトム『アスペルガーとして楽しく生きる』風雲舎、2015